

県営一般農道整備事業（田中・梅原地区）
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(4)

富山県福光町

梅原胡摩堂遺跡群Ⅲ

1996年3月

福光町教育委員会

序

本書は県営農道整備事業（田中梅原線）に伴う発掘調査の結果をまとめたものです。

この道路は梅原胡摩堂遺跡群の中を通過しており、改良工事で遺跡が破壊されるおそれがあったため平成5年度から発掘調査を実施しています。

今回の調査の結果、縄文時代の打製石斧、奈良、平安時代の須恵器、戦国時代の建物跡や井戸跡などが発見され多くの成果がありました。

本書を出土品とあわせて、郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました富山県埋蔵文化財センター・福光町シルバー人材センター・富山県農林水産部及び地元住民の方々に深く感謝申し上げます。

平成8年3月

福光町教育委員会

教育長 吉 江 正 二

例言

- 1 本書は、県営一般農道整備（田中・梅原地区）に伴う富山県福光町梅原胡摩堂遺跡の発掘調査概要である。調査は、平成7年10月18日から同年12月20日までである。梅原胡摩堂遺跡2か所の調査面積はあわせて960㎡である。
- 2 調査は、富山県農林水産部の委託を受け、調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
- 3 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、文化係長鳥越知証が調査事務を担当し、教育次長兼生涯学習課長辻沢功が総括した。調査担当者は以下のとおりである。

福光町教育委員会 主事 佐藤聖子

富山県埋蔵文化財センター 主任 久々忠義

本書の執筆は、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て調査担当者が行った。執筆分組は各文末に記した。

- 4 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。
池田恵子・池野正男・上野章・島田修一・太嶋勇・林敏三・前田敏久・前田廣・前原裕志・溝口博文・宮田達・・
桃野真晃・山本正敏・吉田敏信・金森淑子・西川和美
- 5 本書で使用した方位は真北である。上層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著1967『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社を用いた。

目次

I 位置と環境	1	第10図 9地区の遺物(3)	18
第1図 位置と周辺の遺跡	1	第11図 10地区の遺物(1)	19
II 調査にいたる経過	2	第12図 10地区の遺物(2)	20
第1表 事業計画地内遺跡一覧	2	第13図 10地区の遺物(3)	21
第2図 遺跡の範囲と発掘調査位置	3	第14図 10地区の遺物(4)	22
III 調査の概要	4	図版1 9地区の遺構(1)	
1. 調査の経過	4	図版2 9地区の遺構(2)	
2. 調査の方法	4	図版3 9地区の遺構(3)	
第3図 9・10地区の地形と区割	4	図版4 9地区の遺構(4)	
3. 9地区の概要	5	図版5 10地区の遺構(1)	
4. 10地区の概要	7	図版6 10地区の遺構(2)	
第2表 井戸一覧表	9	図版7 10地区の遺構(3)	
IV まとめ	10	図版8 10地区の遺構(4)	
参考文献	10	図版9 9地区の遺物(1)	
第4図 9・10地区遺構配置図	11	図版10 9地区の遺物(2)	
第5図 9地区の遺構(1)	13	図版11 10地区の遺物(1)	
第6図 9地区の遺構(2)	14	図版12 10地区の遺物(2)	
第7図 10地区の遺構	15	図版13 10地区の遺物(3)	
第8図 9地区の遺物(1)	16	図版14 10地区の遺物(4)	
第9図 9地区の遺物(2)	17	報告書抄録	

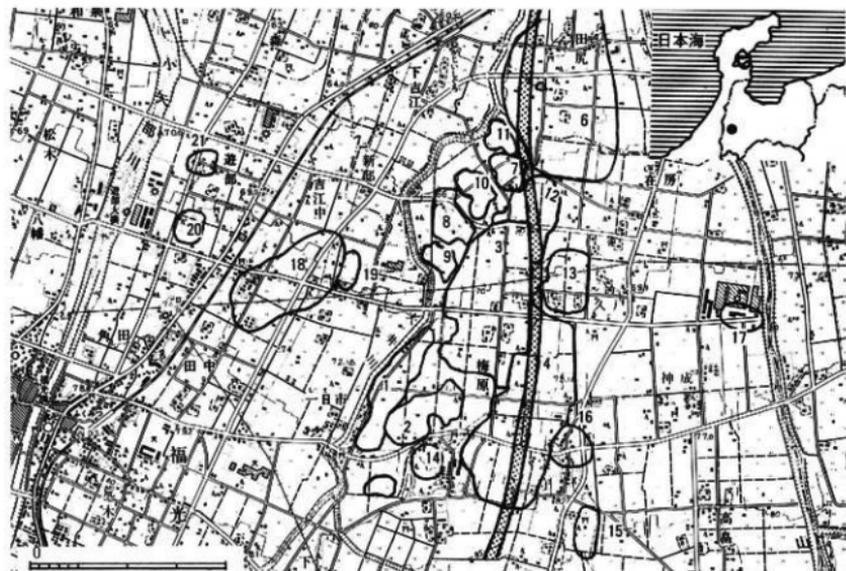
I 位置と環境

梅原胡摩堂遺跡は、富山県西砺波郡福光町梅原地内に所在する。福光町は、石川県との県境をなす富山県の南西部に位置する。県境には養老3年(719)、秦澄大師によって開山されたといわれる靈峰医王をはじめとするなだらかな山脈が連なる。南側に位置する上平村との境にある大門山に源を発する小矢部川が、町の中心部を南北に貫流し、その東を流れる山田川とともに、町の東北部から北に向かって広がる砺波平野を形成している。

遺跡は、小矢部川の支流である大井川と山田川にはさまれた河岸段丘上に立地する。標高75m前後を測る当遺跡の周囲には梅原安丸・梅原出村・梅原落戸・梅原上村・梅原加賀坊・久戸・田尻の各遺跡が密集している。(第1図)

このうち、梅原安丸・梅原胡摩堂・梅原加賀坊・田尻・久戸の各遺跡は、東海北陸自動車道を建設する際に発掘調査が行われ、12世紀中頃から17世紀にかけての大集落跡が発見された。この南側には、うずら山・宗守・竹林Ⅰ・竹林Ⅱ・東殿・徳成などの縄文時代を中心とした遺跡がある。また、梅原胡摩堂遺跡6・7地区では弥生時代中期の出土品があり、梅原安丸Ⅲ遺跡で古墳時代の竪穴住居跡を検出している(福光町教委1991・1994)。このようなことから、梅原落戸遺跡の周辺では、原始時代から今日まで連続と人々が生活していたことがわかる。

文献史料では、古代には福光町の一部が砺波郡川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村とよばれ官舎が置かれていたことが知られる。11世紀には円宗寺頼石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。15世紀には、梅原地内に瑞泉寺の分家寺である梅原坊があった。(佐藤聖子)



第1図 位置と周辺の遺跡

1. 梅原出村Ⅲ遺跡 2. 梅原上村遺跡 3. 梅原落戸遺跡 4. 梅原胡摩堂遺跡 5. 梅原出村Ⅱ遺跡 6. 田尻遺跡
7. 梅原安丸遺跡 8. 梅原安丸Ⅱ遺跡 9. 梅原安丸Ⅲ遺跡 10. 梅原安丸Ⅳ遺跡 11. 梅原安丸Ⅴ遺跡 12. 梅原加賀坊遺跡
13. 久戸遺跡 14. うずら山遺跡 15. 宗守城跡・宗守寺壘敷遺跡 16. 宗守遺跡 17. 久戸東遺跡 18. 仏道寺跡
19. 田中遺跡 20. 常楽寺跡 21. 遊部城跡

II 調査に至る経過

平成元年(1989)、21世紀に向けての大型農業に対応するため、遺跡の所在する梅原地区において「低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業計画」が策定された。しかし、東海北陸自動車道建設に伴う発掘調査から、同事業計画地内には遺跡の広がりが見込まれた。このことから、町教育委員会は、県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けて、平成元年度及び2年度に事業計画地内の遺跡分布調査を実施したところ、広範囲において遺物の散布地を確認した。さらに、同2年度には国庫補助を受けての試掘調査を実施。遺跡の範囲確認を行い、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と遺跡の保護措置について協議を重ねた結果、遺跡の大半は盛土を行う事で水出下に保存し、一部の面工事・農道建設・用排水路部分について本調査を実施することとなった。

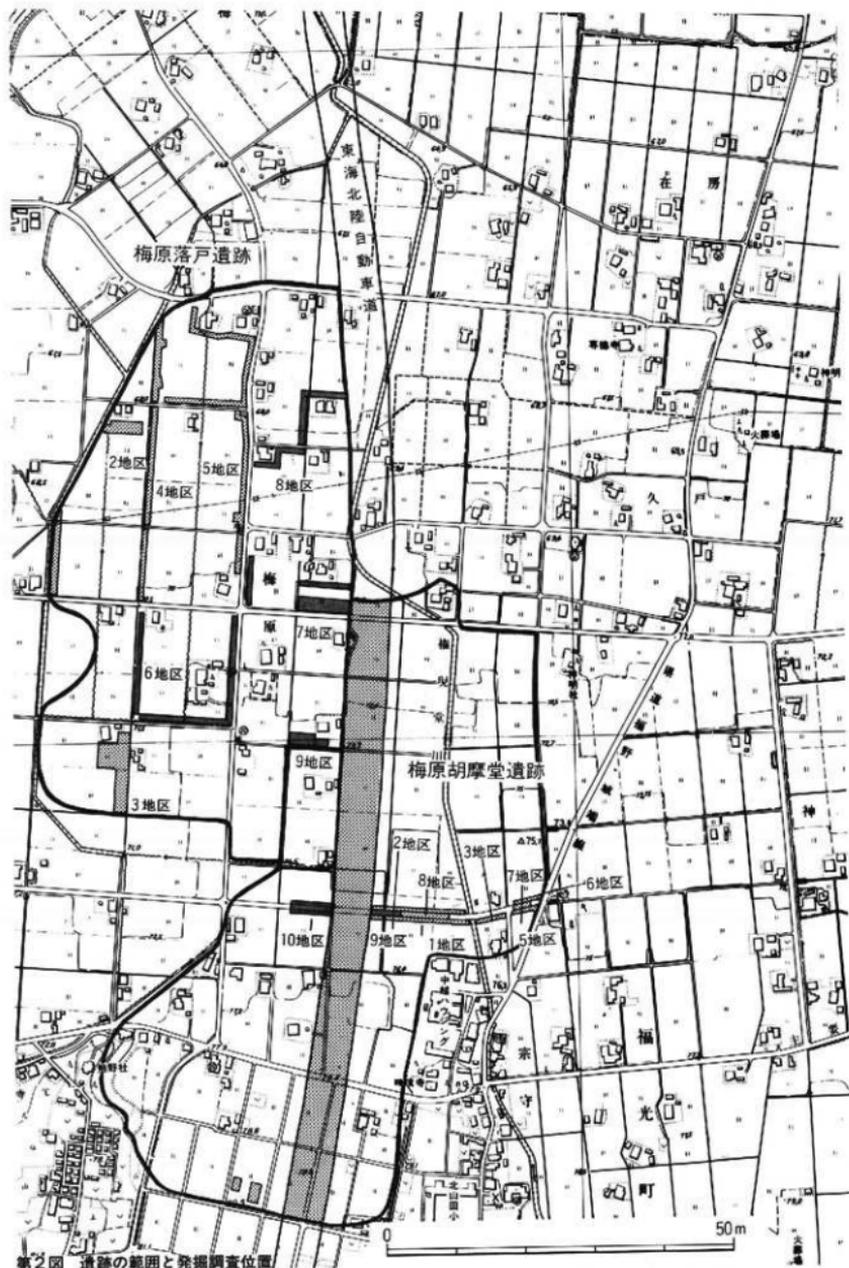
県営農道出中・梅原線は、同事業計画地域内の南側に位置する。同事業に伴い、4m幅の既存の現道を7m幅に拡張することとなったが、当農道部分にも遺跡の広がりが見込まれた。そのため、平成3年度の協議を経て、平成4年度より本調査を実施してきた。今年度は、東海北陸自動車道を挟んだ2地区の調査を行った。

これまでに本調査を実施した面積及び対象遺跡は、次のとおりである。(佐藤聖子)

本調査遺跡		面積
平成4年度	梅原出村Ⅲ遺跡・梅原上村遺跡	計 750 m ²
平成5年度	梅原上村遺跡・梅原胡摩堂遺跡	計1,100 m ²
平成6年度	梅原胡摩堂遺跡	計 960 m ²

第1表 遺跡の概要 (No. は第2図の番号を指す)

No.	遺跡名	所属時代	発見された遺構	発見された遺物
7	梅原出村Ⅲ	旧石器、縄文(前・後・晩・中期?)、古墳～中世、近世、近代?	柱穴、穴、竪穴住居跡、溝、井戸、遺物包含層、(縄文、古代)	縄文土器・石器、須恵器(墨書土器)、土師器、土師質土器、珠洲焼、越前焼、陶磁器、銅貨
		縄文(前・中・後期)古墳、古代～中世、近世、近代	穴、溝、井戸、遺物包含層(縄文)	縄文土器・石器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、土師質土器
8	梅原上村	縄文、古代～中世、近世	柱穴、穴、溝、遺物包含層(古代)	縄文土器・石器、須恵器、土師器、珠洲焼、越前焼、八尾焼?、陶磁器、古銭
		縄文(中・後期)、古代～中世、近世	穴、溝	縄文土器・石器、須恵器、土師器、珠洲焼、越前焼、石臼、陶磁器
11	梅原胡摩堂	縄文(後・晩期)、弥生、古墳、古代、中世、近世	穴、遺物包含層(弥生)、掘立柱建物、溝(古代)、井戸、溝、穴、(中世)、柱穴、穴	縄文土器・石器、弥生土器、石鏃、管玉、剥片(弥生)、須恵器、土師器、灰精陶器(古代)、土師質土器、珠洲焼、越前焼、輸入陶磁器、砥石、石臼、石鏃、漆器、木製品、骨片(中世)、陶磁器



第2図 遺跡の範囲と発掘調査位置

Ⅲ 調査の概要

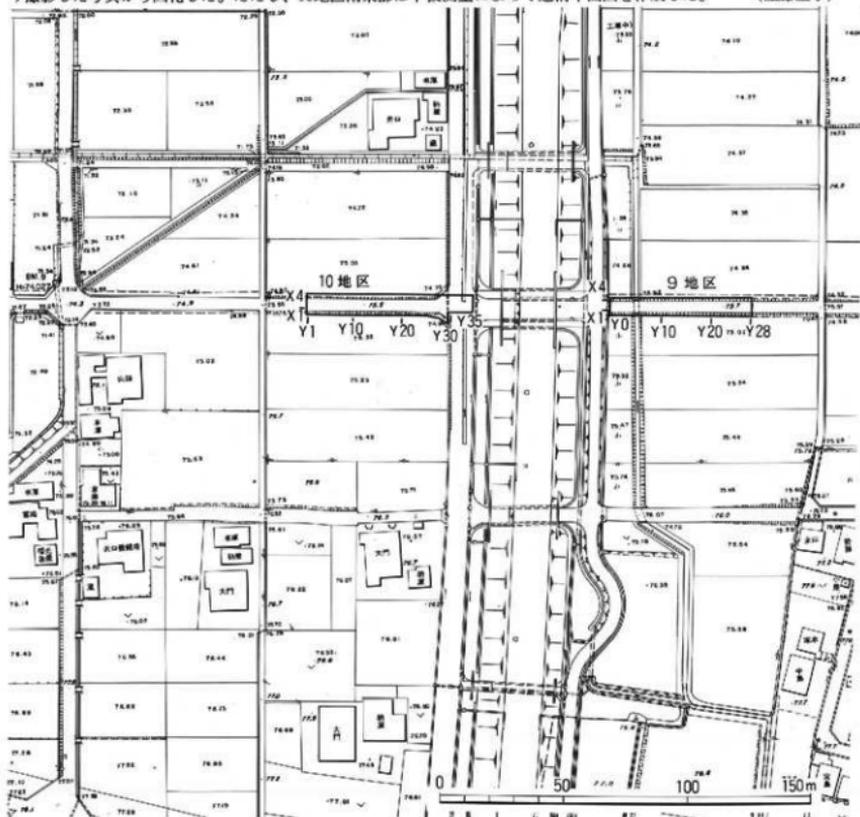
1 調査の経過 (第2・3図)

前述のとおり、今回の調査地区は、東海北陸自動車道を挟んで東側を9地区、西側を10地区とした。9地区は、平成5年度に調査した1・2地区に挟まれ、6年度に調査した8地区に東側で隣接する現道路下である。10地区は、現道路下と拡幅部分も含んでいる。調査面積は、9地区が420㎡、10地区が540㎡である。

2 調査の方法

調査は、まず重機で現道路舗装面とその路床・旧表土の除去を行った。10地区は、拡幅部分が水田であったため、その部分においては耕作土の除去を行った。その後各調査区にあわせて、おおよその東西方向・南北方向に基準杭を10mごとに設置し、調査区割を行った。調査区割は、南から北にX軸、西から東にY軸とし、2mを一区画としてアラビア数字でその位置を示した。

包含層掘削・遺構検出・遺構掘削等は調査員及び作業員が行い、遺構平面図の作成は、ラジコンヘリコプターにより撮影した写真から図化した。ただし、10地区南東部は平板測量によって遺構平面図を作成した。(佐藤型子)



第3図 梅原胡摩堂遺跡9・10地区の地形と区割 (1/2,000)

3 9 地区の概要

(1) 地形と層序 (第3・4図)

9地区は、現況は道路で高くなっているが、その北と南は海拔約75mの水田である。地山面までの深さは15~60cmである。調査区東側は地山面が全体に低く、そこには中世の水路と大正時代の橋本川が流れている。平成5年度に調査した東隣の8地区では、時代の異なる3層(現代の耕作土である①層、黒色土で古代の遺物を含む②層、茶褐色土で縄文時代後期の土器を含む③層)が確認されたが、9地区では①層と江戸時代の包含層と見られる黒色土と灰茶色土だけで、古代・中世の包含層は確認できなかった。

(2) 遺構 (第4~6図、図版1~4)

中世の掘立柱建物1・井戸5・溝9・水田跡1・井堰1・柱穴がある。これらの遺構は重なりがあることから、少なくとも、4期以上に区分されると思われる。なお、昭和初期まで流れていた橋本川(SD12)、江戸時代の水路(SD13・14)や暗渠(SD15)、中世以前にできたと思われる自然の落ち込み(SD07・08)があるが、これらについては説明を省略する。

A 中世 (第4~6図、図版1~4)

掘立柱建物SB01 (第5図) SB01は調査区中央にあり、SD08・10・11、SE03と重なりがある。建物は6本の柱からなり、東西2間(4.8m)南北2間(6.4m)の南北に長い掘立柱建物である。棟方向は北に対して約4度東へ振れる。床面積は約31㎡である。柱間寸法は桁行は3.6m+2.4m、梁行は2m+2.4mである。柱穴の掘方は、東西の柱列が長辺120~130cm短辺80cmの南北に長い長方形、北側の中央柱穴は長辺120cm短辺80cmの楕円形、南側の中央柱穴は径50cmの円形である。柱穴の深さは、長方形柱穴が100~120cm、楕円形柱穴は50cm、円形柱穴は20cmである。建物の棟持柱に相当するところの柱穴が小さい。柱根は、P5に径18cmのもの(木の皮部分)が残っていた。柱は広葉樹のようである。P2・3では黄白色の覆土のなかに柱根痕跡とみられる径20cmの黒土の部分が認められた。P2の底には5~10cm大の河原石があった。出土遺物は、土師器・瀬戸美濃があり、時期は16世紀中葉とみる。

柱穴SK01・P10・11・20~24 (第5図) SK01はSB01の西側2.6mのところにある。直径1m深さ80cmの大きな柱穴で、なかに径約30cmの芯持ちで一部に表皮がついた柱が入っていた。柱の下には、径25cm厚さ12cmの石が礎石のように位置していた。しかし、その石は柱穴の底から10cmほど浮いた状態である。そのようなことから、この柱は建物を支えている状態とはみられない。穴に埋め込まれたものかもしれない。出土遺物は土師器と瓦器があるが、詳しい時期は不明である。P10・11は、SB01P6の東約1mのところであり、SD10と重なりがある。P10には径27cmの、P11には径16cmのいずれも芯持ち柱が残っており、P10の柱の根元には河原石を詰めてあった。P20には短辺22cm長辺13cmの木柱、P21には径22cmの表皮が付いた芯持ち柱、P24には径14cmの芯持ち柱が残っていた。これらの柱根は、P10・11がSB01の南側柱列の延長に位置するので、SB01に伴う可能性があるが、他は規則的な配列は認められず、建物の柱とはいえないだろう。

P22・23は、SB01P5の南にある径20~30cm深さ60cmの柱穴で、底に一辺30cm厚さ5cmの扁平な河原石が置かれていた。河原石は礎石と思われるが、木柱はなく出土遺物もない。

井戸SE01~04・06~08 (第4・5図) 井戸は調査区中央の建物周辺に建物と重なるものもある。井戸はいずれも素掘りの状態であった。平面形は径1.5~1.7mの円形で、深さは2~2.9mである。発掘時も水が湧き出す。SE01は、上部径1.5m深さ2.8mで、側壁はえぐられていた。井戸のなかには、一辺30~50cmの大きな石が入っていた。出土遺物は、珠洲・越前・青磁・桶の側板があり、時期は16世紀前半とみる。SE02は、上部径1.7m深さ2.6mで、円筒形である。出土遺物は、土師器・桶の底板・笠木があり、時期は15世紀後半とみる。

溝SD06Bと井堰 (第6図) SD06B(注1)はSB01の東約10mのところにある水路である。上幅3m底幅1.5

m 深さ60cmである。溝は北側で20cmの段があり、段の手前には径2～15cmの杭が20本近く打ち込まれている。杭の根元には一辺30cmほどの大きい石も置かれていた。この木杭群は、ここで水をせき止める井堰の芯材とみられる。せき止めた水は、井堰の手前で左岸へ導水されるらしい。左岸には溝に沿って幅1.5m 深さ20cmの平坦面があり、そこが分水路と考えられる。出土遺物は、土師器・珠洲・瓦器があり、時期は16世紀前・中葉とみる。

(注1) 築堰当初、このあたりはひとつの溝と考え書きつけたが、のちに中世の溝2本と旧橋本川が重なっていたことがわかり、中世の溝のうち西の溝を06B、東の溝を06Aとした。

溝SD08と水田跡(第6図) SD06Bの左岸にある幅40cm深さ10cmの溝で、SB01、SE02・03、SD07と重なりがある。南北方向の溝が途中で東へ曲がるL字形であるが、東西の溝は途中で屈曲する。この屈曲は、SD06Bの分水路がその先にあるため、それをさけてSD06Bへつなげるためにそうなったと考えられる。L字の内側は溝との境にあたる場所の幅20～30cmはわずかに高いが、その内側は溝の外側より15cmほど低く、また平坦である。このようなことから、溝沿いの高まりは水田の畦の基底部とみられ、平坦な部分は水田面であったと考えられる。出土遺物は、土師器があるが、詳しい時期は不明。遺構の前後関係については、SB01P6の北側一帯で焼土が多く残っていたことが手がかりになる。この焼土は、SB01に伴う可能性(この一画が炊事場と考えるとすれば)があり、それが水田造成のために攪乱されている。そのようにみると、SB01建物廃絶後に水田となったと考えられる。

溝SD06A・01・04・05・10・11(第4～6図) これらの溝は調査区の東端にある。SD06Aは旧橋本川と暗渠が重なっているので詳細は不明であるが、幅約2m 深さ約1mの南から北へ流れる水路である。出土遺物は、珠洲・土師器・青磁・青花があり、時期は、13世紀に始まり16世紀に埋没したと考えられる。SD05はSD06Aの東5mに並行する幅1m 深さ15cmの溝である。出土遺物は土師器があり、時期は16世紀とみる。SD01は、幅1.8m 深さ20cmの溝で、東から西へ流れ、SD06Aへ合流する。平成5年度調査の8地区SD01の続きである。遺物は土師器・瀬戸美濃・青磁があり、時期は15世紀後半とみる。SD04は、SD01の北2mの並行する幅1m 深さ15cmの溝で、SD06Aへ合流するとみられる。出土遺物は、珠洲がある。また覆土上面から銅製香炉の蹴脚が出土した。時期は不明である。

SD10・11は調査区中央を西から東へ向かう溝である。SB01・SD08と重なりがある。SD10は、幅約1m 深さ35cm、SD11は、幅80cm深さ20cmである。出土遺物は、SD10は珠洲・越前・土師器があり、13世紀、SD11は、珠洲・土師器・瓦器があるが、時期は不明である。

(3) 遺物(第8～10図、図版9・10)

縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世のものが、整理箱(長さ65cm幅40cm深さ10cm)で15箱と木製品5箱が出土した。

A. 縄文時代(図版9上)

打製石斧がある。

B. 奈良・平安時代(第8図1～6、図版9)

1・2は土師器壺である。いずれも調査区東端から出土した。1は口縁部が三角形で8世紀末～9世紀初期とみる。3は須恵器長頸瓶の頸部で、二条の沈線が巡る。4～6は須恵器杯で、4は体部と底部の境が角ばる。6は細くやや高い高台が付く。3は8世紀前半か。その他は8世紀末～9世紀初期とみる。

C. 中世(第8～10図、図版9・10)

SB01(7・14) 7はP3出土の瀬戸美濃瓶。黄灰色のうわ葉がかかる。時期は16世紀後半とみる。14はヨコナダ土師器皿である。ほかにP4から土師器皿が出土した。

SK02・P4・9(8～10) これらはSB01の東にある柱穴である。8はロクロ土師器皿(ろくろの回転力を使って成形した素焼き土器)で、底部に糸切り痕を残す。口縁部に煤の付着があり灯明皿である。9は瓦器の火舎(香炉)。

10はヨコナデ土師器(手づくね成形の素焼き土器で、口縁部をよこなです)である。8は井口城跡で出土がみられ15世紀後半に、10は上市町弓庄城跡で出土がみられ16世紀前・中葉に、それぞれ位置づけられている〔井口村教委1990・上市町教委1985〕。

SE01・02・04~06 (11~14・47~50) 11は越前甕で、口縁部形態は一乗谷朝倉氏遺跡における分類でⅢ群bまたはⅣ群aとみられ、時期は15世紀後葉から16世紀前葉とされる〔福井県1983、岩田1988〕。47は高さ14cmの桶の側板である。12はロクロ土師器皿で、15世紀後半。49は直径約33cmの桶の底板である。2枚の板をつないだもので、側面に接合のための木釘が残っている。50は建築部材の笠木とみられる。笠木というのは、屋根の棟の上にかぶせて、棟からの漏水などを防ぐものである。幅8cm厚さ4.5cmの針葉樹の征目板の一面を山形にえぐり、約16~17cmの間隔を置いて、幅5cm長さ6.5cm深さ約3cmのほぞ穴が互い違いにうがたれている。このほぞ穴は、屋根にかかる垂木をうけるものであろう。山形のえぐりの角度から屋根の傾斜角度を推定すると、20~25度である。ほぞ穴が垂木を受けるものとすれば、垂木は、32~34cm間隔で、屋根に交互にうがたれていたことになる。両端は折れているので、長さは不明である。13は、ロクロ土師器皿で15世紀後半である。46は、黄灰色の凝灰岩製の板石塔婆である。梵字「ハシ」が刻まれている。SE06から、クルミ・モモの核、炭化米・ムギ・マメ類が出土した。

SD01~05・06A (15~30) 15はヨコナデ土師器皿、16は灰釉瀬戸美濃皿、17は蓮弁文を弧線と縦線で描く青磁碗。18はヨコナデ土師器皿、19はロクロ土師器皿の灯明皿、20は瀬戸美濃天目茶碗。21は火舎の獸脚。獸脚は表面ははげているが、金色部分がある金銅製である。21はロクロ土師器皿。23はヨコナデ土師器皿、24・25はロクロ土師器皿、26~30は珠洲で、26・27は甕、28は壺、29・30は片口鉢(すり鉢)である。

土師器皿は、15・18・23は13世紀後半、19・24・25は15世紀後葉~16世紀前葉とみる。珠洲は珠洲編年第三期(13世紀後半)とみる〔吉岡1994〕。

SD07・10 (31~36) 31~35はヨコナデ土師器皿、31・32・35は口縁部が立ち、33・35は口縁部が外反する。時期は13世紀後半とみる。36は瀬戸美濃碗で、灰色のうわ薬がかかる志野とみられ、16世紀後葉。SD07は、SD10のつづきで、SD08に開まれた水田面とかかさなるところである。SD07は土師器皿からみて古い時期であるので、36は水田あるいはSD06Bに伴う可能性が高い。

SD06B (39~41) 39はヨコナデ土師器皿。40は珠洲片口鉢、41は瓦器の風炉で、口縁部にスタンプ文がある。39・40は16世紀前・中葉。風炉は畿内では14世紀後半から出現するといわれる〔菅原1989〕。

SD14 (37・38) 37は瀬戸美濃天目茶碗、38は越中瀬戸皿である。天目茶碗は、茶色のうわ薬がかかり、口縁部が立つので、瀬戸・美濃大窯編年の第11小期(17世紀後半)に相当しよう〔藤澤1992〕。

その他 (42~45) 包含層とその他の遺構から出土したもの。42~44は、15世紀後葉のロクロ土師器。45は瓦器火鉢。口縁部はひだ状の凸体、胴部に花文のスタンプを押印する。暗渠(SD15)からの出土であり、江戸時代以降のものであろう。

4 10地区の概要

(1) 地形と層序

10地区は、北側に水田、南側に民間会社建物が有り、道路で高くなっている部分もあるが、海拔75m前後である。耕作土から遺構検出面までの深さは平均20cmであり、基本土層は、①層：現代の耕作土(灰黒色土)、②層：黒褐色土、③層：黒色土であるが、②層と③層の間で部分的に茶黒色土、黄灰色粘質土が入る箇所もある。

(2) 遺構(第4・7図、図版5~8)

16世紀前半の建物跡2、砂利敷き道路1、井戸37、堀1、溝12、土坑21がある。

A. 中世

建物跡SB01 (第7図、図版5～7)

調査区西寄り、南側に位置する。建物の半分は調査区外の為、全体像はつかめないが2間(4.7m)×2間以上(3.5m以上)の南北に伸びる建物であろう。よって、面積は16㎡以上と考えられる。棟方位は7°東にふれている。柱穴の掘方は、ほぼ一律長辺1.2m×短辺1mの楕円状を呈している。深さは65～70cmである。P2、P3には木柱根が残っており、P2は約26cm、P3は約18cmのものであった。柱穴からは遺物は出土しなかったが、建物の敷地内にある3基の井戸のうち、SE12からは16世紀前半の遺物が出土している。

SB02 (第7図、図版6・7)

SB01の東4mに位置する1間(2.8m)×2間(4.5m)、面積12.6㎡の建物である。棟方位は、北に対して3°西にふれている。建物の東側柱列、P1～P3はSD03と重なっている。SB01と比べて、柱穴は小型であり、約30cmである。深さはP4～P6が35～45cmである。P1～P3はSD03を掘削する際に削られて浅くなっている。遺物は、SB02P5より青磁、瀬戸美濃が出土しており、時期は16世紀前半である。

堀SD03 (第7図、図版7)

調査区中央に位置する。幅約3m、深さ50cmでほぼ南北に走る。溝の覆土は東側が茶灰色粘土層で厚く堆積していて、一度に堀を埋めたような状況である。出土遺物には、珠洲・青磁がある。時期は16世紀前半である。

砂利敷き道路SD05 (第4・7図、図版6・8)

調査区西側に位置する。道路幅は2.5mで西側に幅20cm、深さ10cm、東側に幅1.2m、深さ15cmの側溝がある。路面には、1～10cm大の砂利を5cmの厚さに隙間無く敷きつめている。SD05は道路の下層にある幅1.6m、深さ35cmの溝である。道路はこの溝を埋めて作られている。SD05の土層は、底に黒色土が薄くあるが、黄白色粘質土が厚く堆積しており、埋めた様子である。側溝から土師器・珠洲、SD05からは下駄が出土しているが、詳しい時期は不明である。

区画溝SD11・12 (第4図、図版7)

SD11は幅50cm、深さ10cmでX1、Y15～21において東西に伸びる溝である。Y15～16部分では掘り方が残っていないが、SD12と直角に交わっていたようである。SD12は、Y15付近において南北に伸びる溝である。幅約60cmで深さがほとんどなく、掘り方が確認しづらい。遺物の出土も無い為、詳細は不明だが、なんらかの区画をしていた溝と思われる。

土坑SK01・06・07・08・09 (第4・7図、図版5～8)

SK01は、東西3m×南北4.3m、深さ10～14cmの南北に長い方形の土坑である。SB01と重なり、この建物に伴う施設と考えられる。珠洲・土師器が出土している。他の土坑も規模は違うものの、深さは10cm前後を測るものが多い。SK06は東西1.7m×1.3m、深さ15～20cmである。中世土師器、越前が出土している。SK07は東西1.6m×南北1.8m、深さ約10cmの方形土坑である。SK08は北側が調査区外へのびている為、全体の規模はわからないが東西3.7m×南北1.3m以上の方形土坑となる。内部には、SE24を伴う。珠洲・甕が出土している。

井戸SE01～37 (第4・7図、図版5～8)

井戸は、今回調査区内にまんべんなく検出された。計37基の特徴を第2表に示した。単純計算だと、14.6㎡あたりにつき1基、井戸が存在することになるが、特にSB01・SB02の内外側周辺、X1～X4、Y25～Y29の間に密集している。井戸の直径は平均約70cmで、深さは平均80cmである。ほとんどの井戸で水が湧きだした。

(3) 遺物 (第11～14図、図版11～14)

中世、近世を主体に整理箱で25箱出土した。

柱穴P9・17・18・28 (51～55)

51は瀬戸美濃の皿である。52は青磁の椀である。ともにSB02P5から出土し、時期は15世紀末～16世紀前半である。

る。53はP9から出土した土師器・皿である。口縁が直線的に開き、端部が尖っている。54 (P28)・55 (P18)は越中瀬戸の皿である。55は緑灰色の釉薬を施し、内面には菊の印花、底部裏にはヘラ記号がある。時期は16世紀中葉である。

土坑SK03・04・05・08・09・10・12 (56~63)

56 (SK03)は瀬戸美濃の天目茶碗である。57 (SK04)は瀬戸美濃の皿である。58 (SK05)は越中瀬戸の皿である。59 (SK08)・60 (SK09)・63 (SK12)は珠洲である。59は壺の底部、60は壺の底部、63はすり鉢の体部破片である。61・62 (SK10)は、土師器皿である。これらの時期は16世紀前・中葉である。

井戸 (64~82, 89~104)

SE05 90は柄杓の底板である。直径約9.2cm、厚さ5mmである。SE06 64は土師器小皿で、65は高台を抉出した白磁の皿である。SE08 66は土師器皿である。口口製で底部をヘラケズリして糸切り痕跡を消している。時期は16世紀前半である。SE10 96は側面に連続した抉りと木釘穴があり、箱物の部材であろう。97は下駄である。下半部に草花の模様を線刻してある。SE12 67は瀬戸美濃の天目茶碗である。68は香炉の足である。鉄製鋳造品で、足は獣の足を模している。また、図示していないが長さ約8cm、厚さ5mmほどの木片が2枚出土した。側面を丸くえぐり、中央に切れ込みがある。2枚を十字に組み合わせて灯明皿を乗せる灯台と考えられる。SE13 63は珠洲のすり鉢である。SE14 99は挽白である。白い色をしており、石材は医王山の石と思われる。SE15 70は珠洲焼の壺である。V・VI期 (15世紀代) であろう。71は瓦器のすり鉢である。102は桑山石を加工した挽白である。SE16 92は曲物底板である。SE21 69は越中瀬戸の天目茶碗である。鉄積を施している。SE25 72は土師器の皿である。内外面に煤が付着している。93は杓子の未製品である。SE26 73は土師器の皿である。74は珠洲の小型壺で、内外面及び断面には漆が付着してあり、漆容器として用いられたものである。SE27 75・76は瀬戸美濃である。75は灰釉の皿で、内面にかたばみの印花文がある。76の小壺は内面に漆が付着しており、漆容器とみられる。94は柄杓の取っ手であろうか。95は吊瓶である。103は桑山石を加工した茶臼である。SE28 91は曲物の底板であ

第2表 井戸一覧表

遺構番号	形状	直径	深さ	埋土	出土遺物
SE01	円形	0.72m	0.76m	黒色土	土師器、越前、瀬戸美濃、炭化米
SE02	円形	0.80m	0.73m	黒色土	越前、炭化米
SE03	楕円形	1.00m	0.99m	黒色土	土師器、瀬戸焼、桃の核
SE04	円形	0.92m	0.98m	黒色土	なし
SE05	円形	1.14m	1.25m	黒色土	土師器、瀬戸美濃、楕円板
SE06	円形	0.80m	0.97m	黒色土	土師器、白磁
SE07	方形	0.78m	0.81m	黒色土	土師器
SE08	楕円形	0.74m	0.74m	黒色土	土師器
SE10	不整形	0.92m	1.18m	黒色土	土師器、下駄、組物?
SE11	不整形	1.10m	0.84m	青灰色粘土	なし
SE12	円形	0.86m	0.97m	黄白色粘土	土師器、瀬戸美濃、炭化米、鉄製香炉、石灯明
SE13	楕円形	0.90m	1.16m	黒色土	陶磁器、漆器、炭化米、炭
SE14	円形	0.52m	0.54m	黒色土	挽白
SE15	円形	0.70m	0.65m	茶黑色土	石臼
SE16	円形	0.70m	0.99m	茶黑色土	曲物底板
SE17	円形	0.80m	0.69m	茶黑色土	炭化米
SE18	円形	0.92m	0.72m	黒褐色土	なし
SE19	円形	0.72m	0.41m	黒褐色土	なし
SE20	円形	0.68m	0.94m	茶黑色土	なし
SE21	方形	0.64m	0.59m		越中瀬戸
SE22	円形	0.68m	0.70m	黒色土	越前
SE23	円形	0.54m	0.82m	黒褐色土	珠洲、炭化米
SE24	楕円形	0.70m	0.88m	黒褐色土	土師器、炭、桃の核
SE25	円形	0.54m	0.82m	黒褐色土	土師器
SE26	楕円形	0.68m	0.70m	茶黑色土	土師器、珠洲、瓦器
SE27	円形	0.80m	0.81m	茶黑色土	土師器、瀬戸美濃、呂鉄、茶臼、越前
SE28	円形	0.80m	0.87m	茶黑色土	瀬戸美濃
SE29	方形	0.56m	0.79m	黒褐色土	瀬戸美濃、越中瀬戸、挽臼
SE30	円形	0.64m	0.90m	茶黑色土	瀬戸美濃
SE31	円形	0.78m	0.60m	茶黑色土	なし
SE32	楕円形	0.50m	0.74m	黒褐色土	なし
SE33	方形	0.70m	0.73m	黒褐色土	珠洲
SE34	方形	0.60m	0.73m	黒褐色土	なし
SE35	方形	0.80m	0.82m	黒褐色土	挽臼
SE36	楕円形	1.20m	0.70m		なし
SE37	円形	0.76m	0.68m		瀬戸美濃、珠洲

る。SE29 77は瀬戸美濃の灰釉皿である。時期は16世紀中頃である。78は越中瀬戸の天目茶碗である。鉄釉を施しており、高台は削り出し高台である。100も桑山石を加工した挽臼である。104は緑色凝灰岩を加工した鉢である。SE33 79は珠洲の壺である。SE35 101は挽臼である。SE37 83は瀬戸美濃の灰釉皿である。

清SD03・05・09 (80・81・89・98)

80・81はSD03から出土した。80(SD03)は青磁の皿である。15世紀の後葉から16世紀前葉である。81(SD03)は青白磁・椀の底部である。内面には、「高」の文字がある。98はSD05から出土した下駄である。89はSD09から出土した寛永通宝である。江戸時代である。

包含層 (84~88)

84は珠洲すり鉢である。85は瀬戸美濃の天目茶碗である。86は越中瀬戸の皿である。87は白磁の皿である。88は皇宋通宝である。(佐藤聖子)

IV まとめ

- 1、縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺物が出土し、中世・近世の掘立柱建物(住居)・井戸・水路・井堰・水田が発見された。
- 2、中世・近世の遺構は、13世紀に遡るものもあるが、16世紀前・中葉を主体とする。この時期、梅原には、井波瑞泉寺連欽の子賢勝、その子賢春、淨珍などが住んでいたとされ、その寺は梅原坊と呼ばれている[高瀬監修1994・金龍1994]。出土遺物には、瓦器・鉄製・金銅製の火舎(香炉)、茶道具である瓦器風炉など、一般の集落とはおもむきを異にする遺物がある。そのようなことから、これらの遺構は、梅原坊に関係した遺構とみられる。(久々忠義・佐藤聖子)

参考文献

井口村教育委員会1990『井口城跡発掘調査概要』

上市町教育委員会1985『富山県上市町弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』

福井県教育委員会・朝倉県立朝倉氏遺跡資料館1983『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』

岩田隆1988『越前に於ける中世土器の様相(15~16世紀)』『北陸の中世土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会

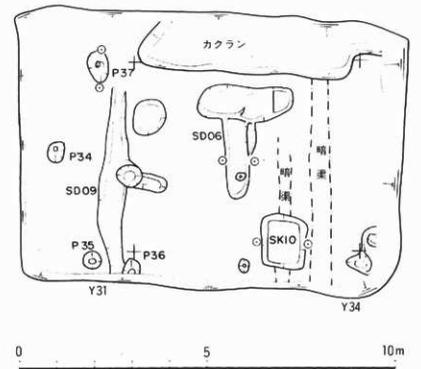
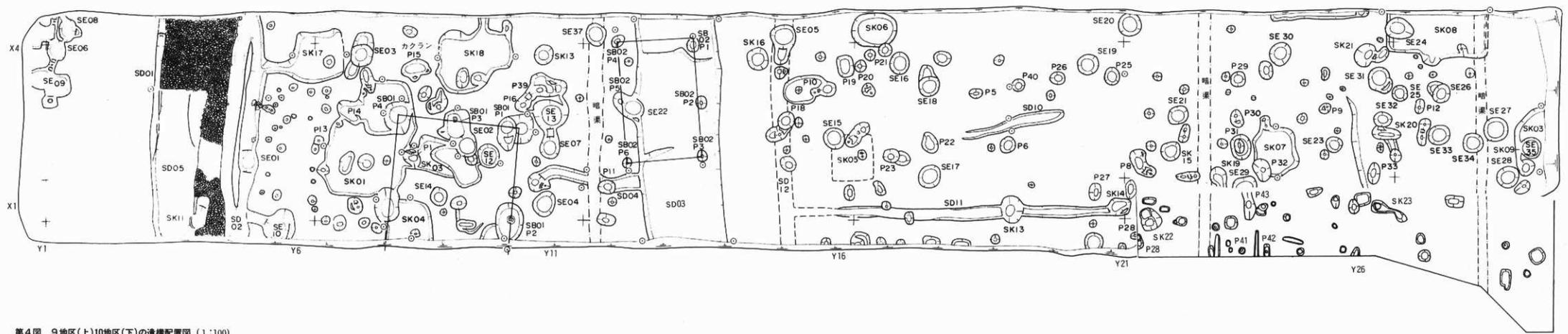
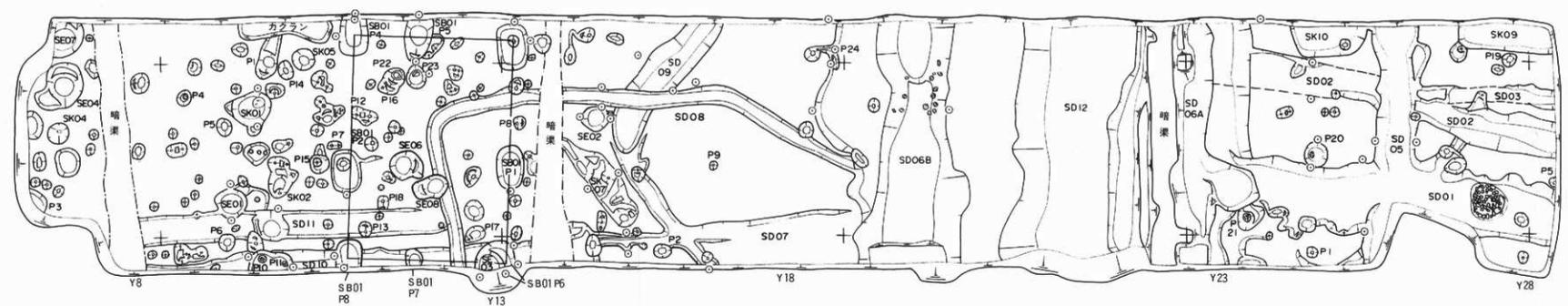
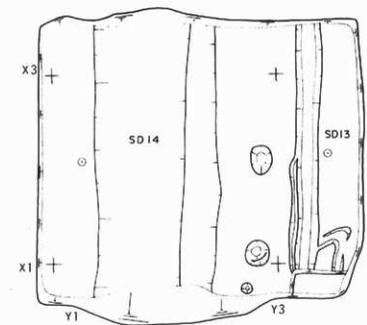
菅原正明1989『西日本における瓦器生産の展開』『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』国立歴史博物館

藤澤良祐1992『大瀬川工人集団の史的考察—瀬戸・美濃系大瀬を中心に—』『国立歴史民俗博物館研究報告第46集』

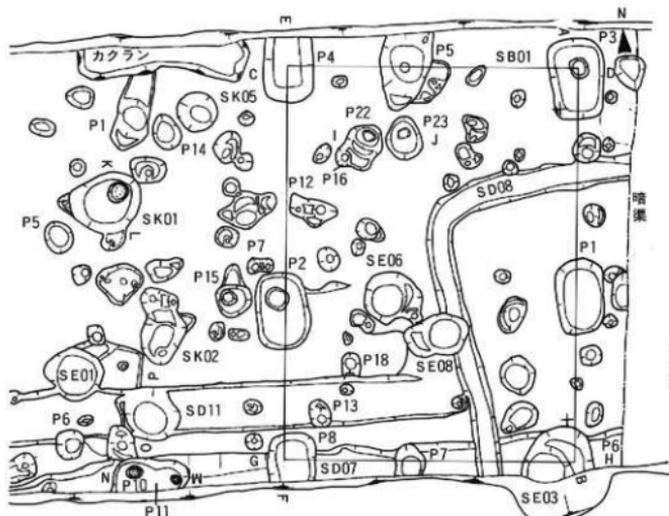
吉岡康輔1994『中世須恵器の研究』

高瀬重雄監修1994『日本歴史地名大系第16巻 富山県の地名』平凡社

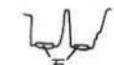
金龍教英194『梅原坊』『富山県大百科事典』



第4図 9地区(上)10地区(下)の遺構配置図 (1:100)



I P22 P24 J 75.9m



K SK01 L 75.9m



<P10-11>
①茶黒色土(2.5Y3/1)
②青黒色土

南SD07北 74.5m

<SD07>

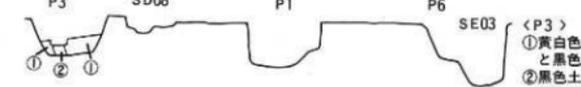
①茶黒色粘質土(2.5Y3/1) 酸化鉄含む

O SD11 P 74.7m

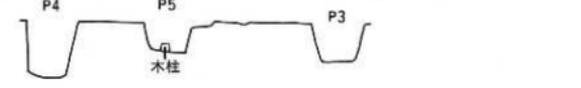


①黒褐色粘質土(2.5Y4/1)
②黄白色粘質土(2.5Y7/4)

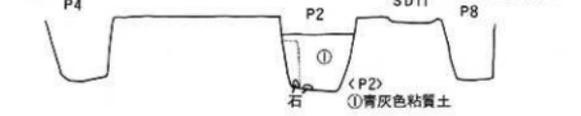
A P3 SD08 P1 P6 SE03 B 75.9m



C P4 P5 P3 D 75.9m



E P4 P2 SD11 P8 F 75.9m



G P8 P7 SD08 SE03 P6 H 72.4m



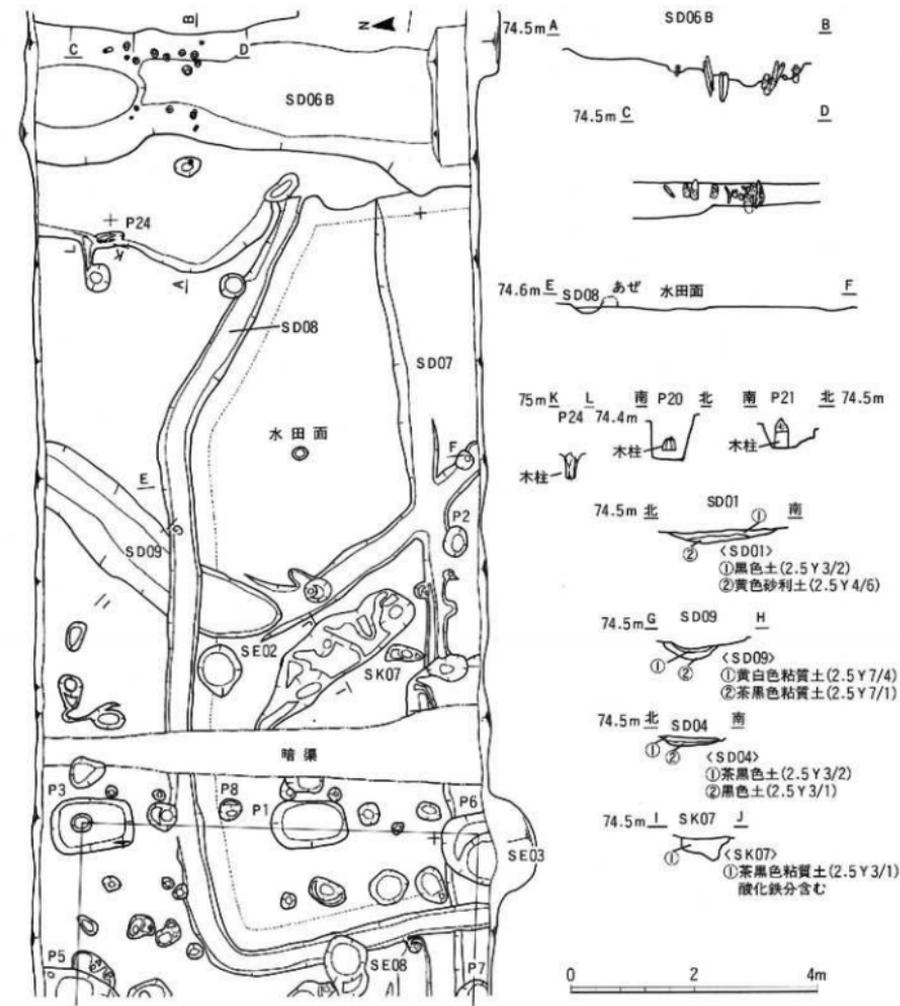
西 SD14 東 SD13 74.7m



<SD13>
①黒褐色粘質土



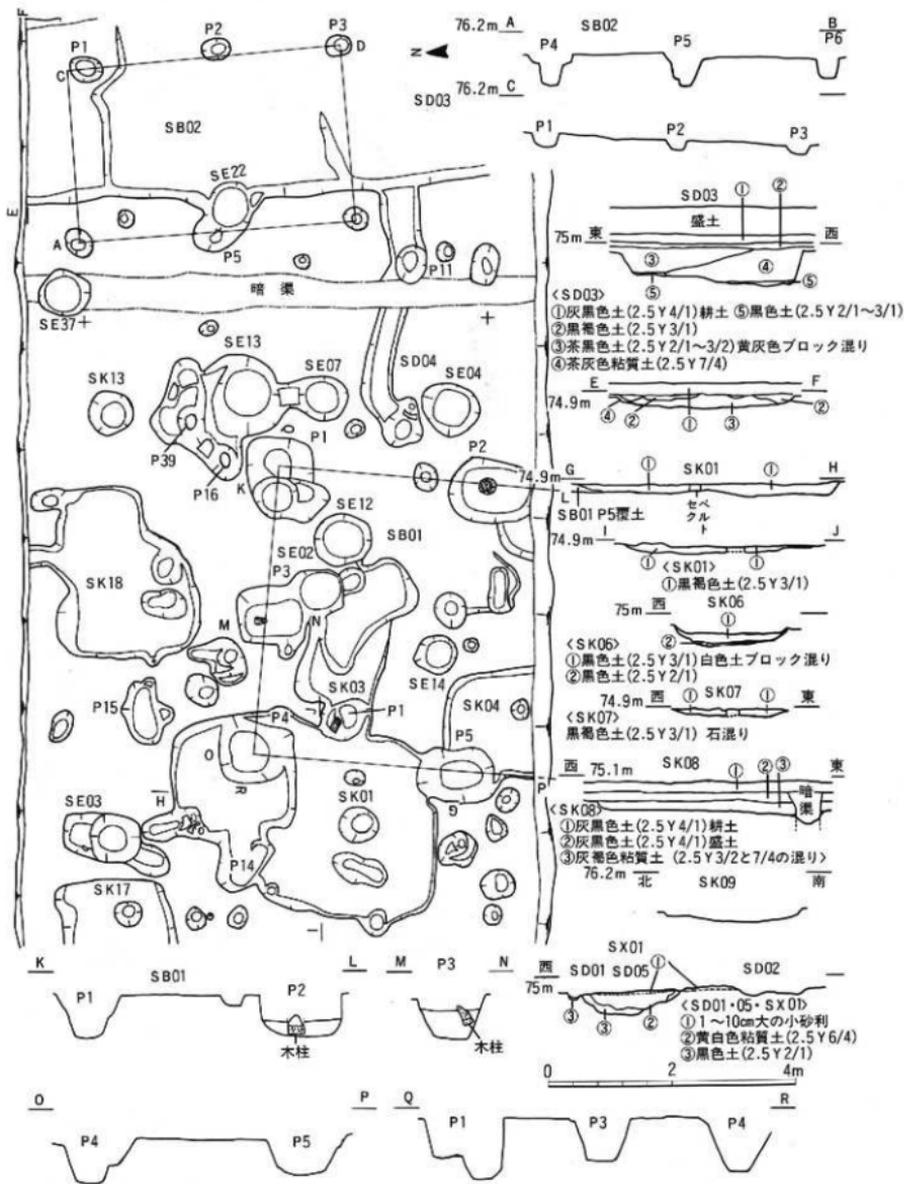
第5図 9地区の遺構(1) SB01ほか



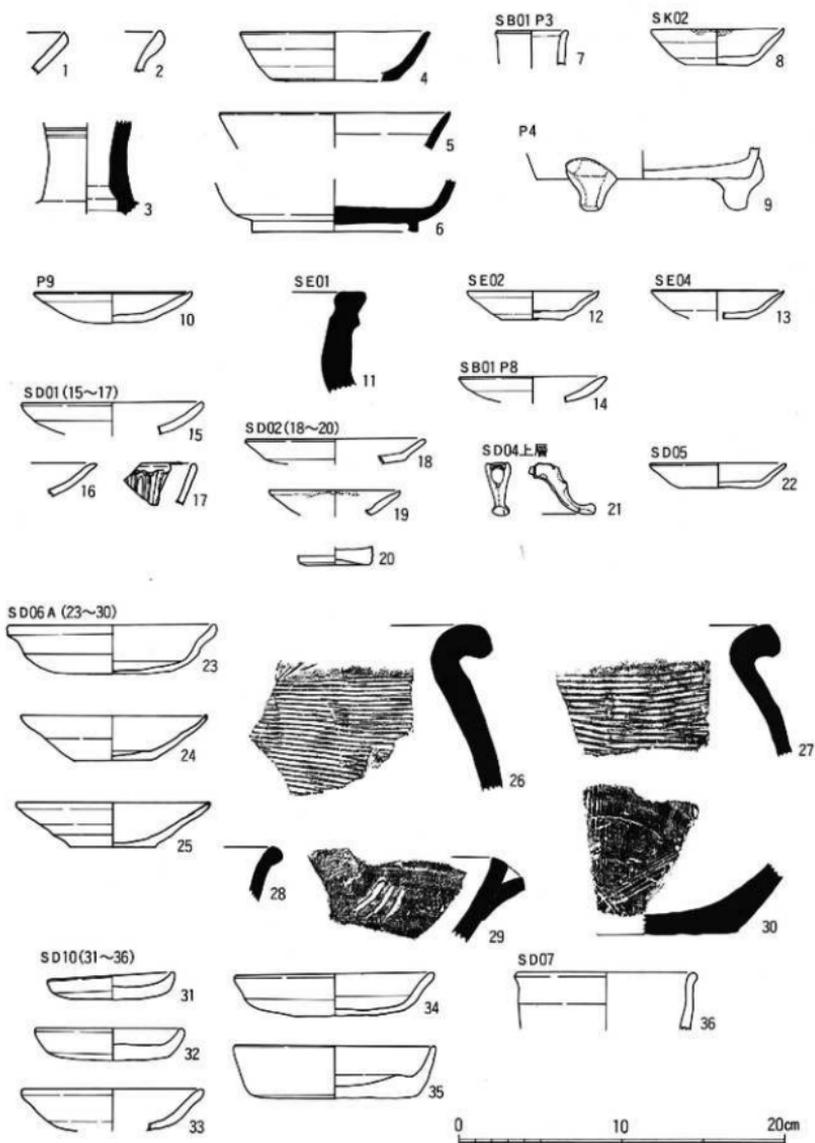
<SD06A・B・SD12>

- ①灰色土(2.5 Y 4/1) 旧耕土 ⑤茶黒色土(2.5 Y 3/3) 酸化鉄含む ⑧茶黒色砂利土
 ②黒色土(2.5 Y 3/1) ⑥灰茶色土(2.5 Y 4/3) ⑨黒色粘質土(2.5 Y 3/1)
 ③灰黒色土(2.5 Y 4/2) ⑦茶黒色土(2.5 Y 3/3) 酸化鉄含む ⑩灰黒色土(2.5 Y 4/2)
 ④黒褐色土(2.5 Y 3/2) 酸化鉄含む ⑪黒色粘質土(2.5 Y 3/1) 酸化鉄分含む
 ⑫赤褐色砂礫土(10 Y R 4/4) 瓦・陶磁器含む
 ⑬赤褐色砂礫土(10 Y R 4/4) 瓦・陶磁器含む
 ⑭黄白色粘質土(2.5 Y 8/4)
 ⑮灰色砂土(2.5 Y 5/1)
 ⑯灰黒色土

第6図 9地区の遺構(2) SD06B・SD08ほか

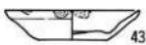
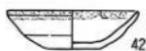
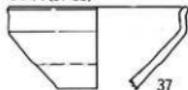


第7図 10地区の遺構 SB01-02・SD03ほか

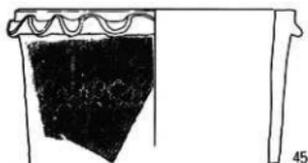
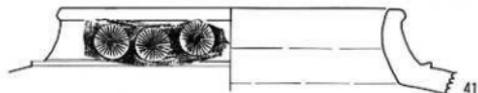
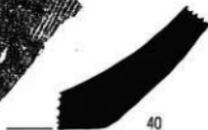


第8图 9地区出土遺物(1)

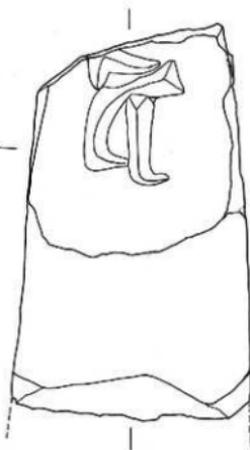
SD14(37-38)

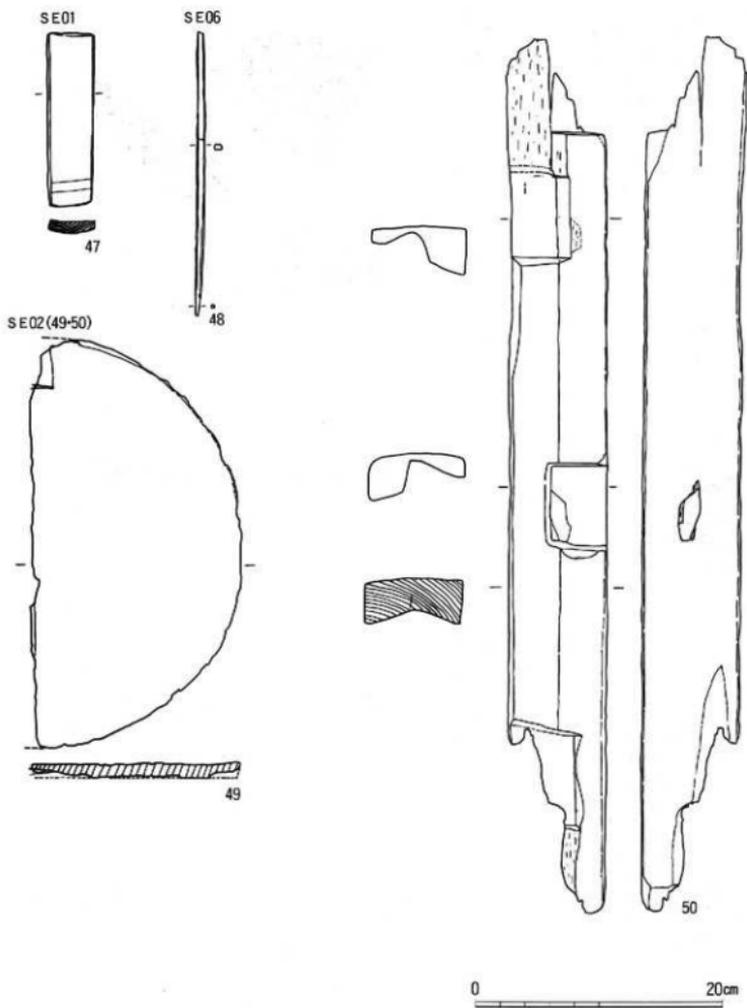


SD06 B (39~41)

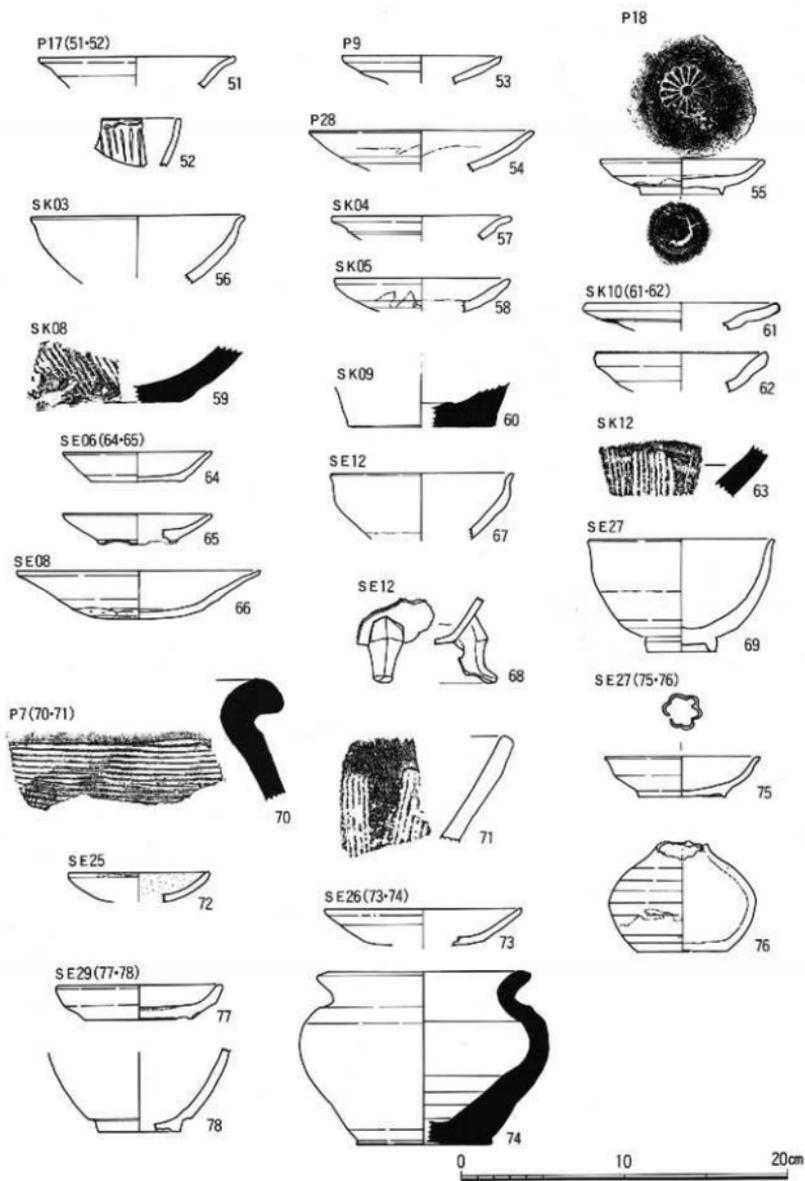


SE06



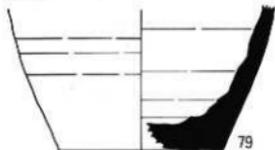


第10図 ㊸地区出土遺物(3) 木製品

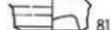
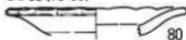


第11图 10地区出土遺物(1)

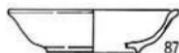
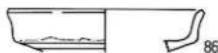
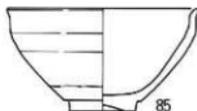
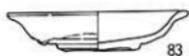
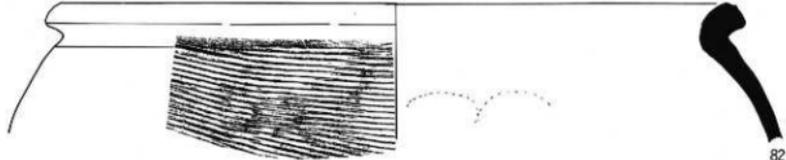
SE33



SD03 (79-80)

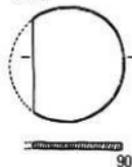


SE37 (81-82)



0 10 20cm
89~93(±1/4)

SE05



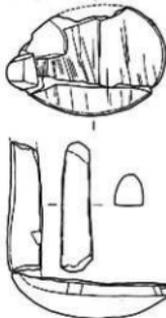
SE28



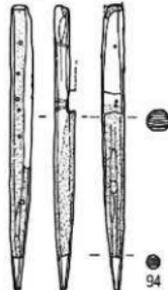
SE16



SE25

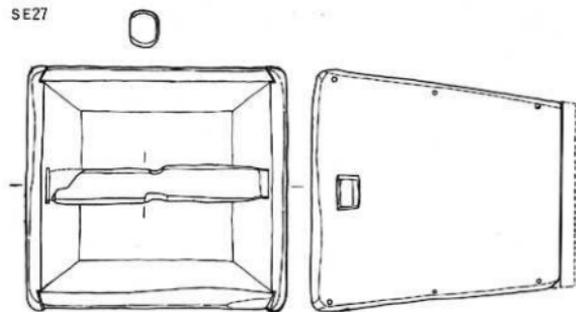


SE27

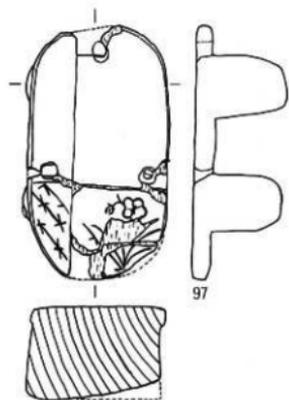
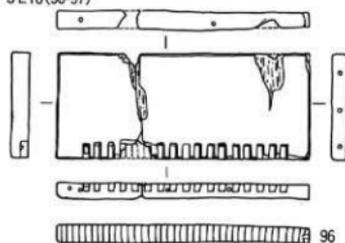


第12图 10地区出土遺物(2) 下段:木製品

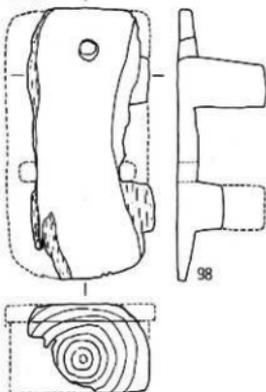
SE27



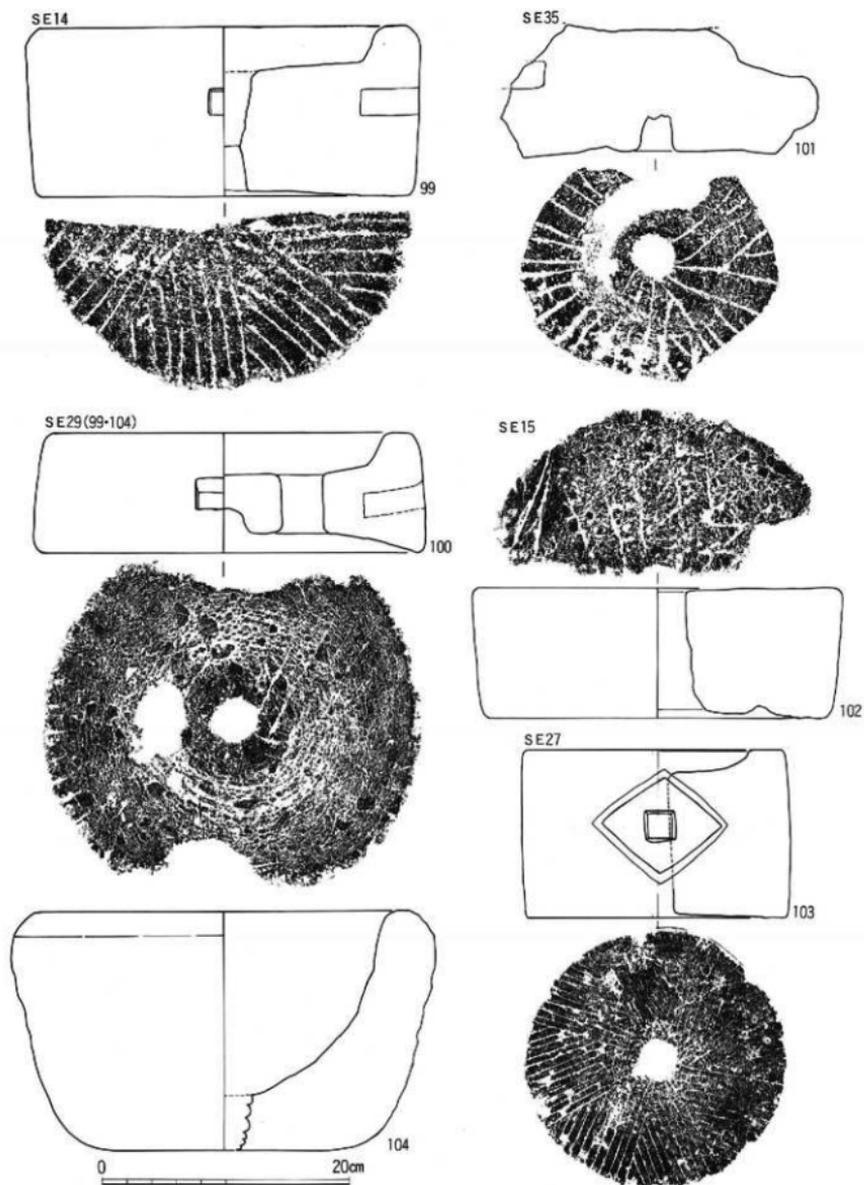
SE10(96-97)



SD05



0 10 20cm



第14图 10地区出土遺物(4) 石製品

图 版

図版 1

9地区の遺構(1)



1. 遠景(上空東から)



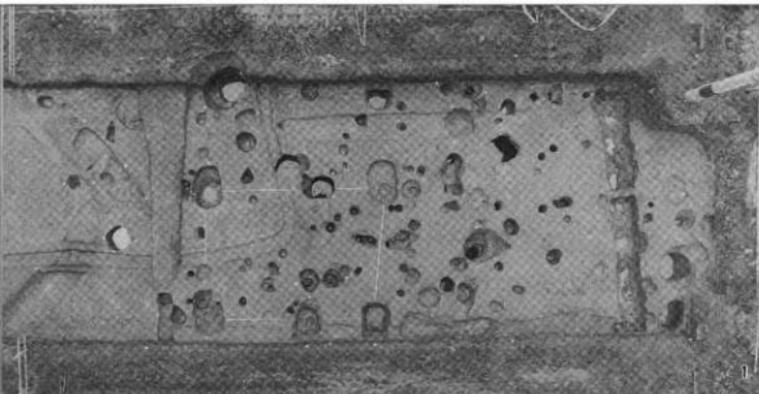
2. 近景(西から)



3. SD01~06(東から)

図版 2

9地区の遺構(2)



1. SB01付近(上空から)



2. SB01付近(西から)



3. SD08・SD06B(東から)

図版3

9地区の遺構⑬

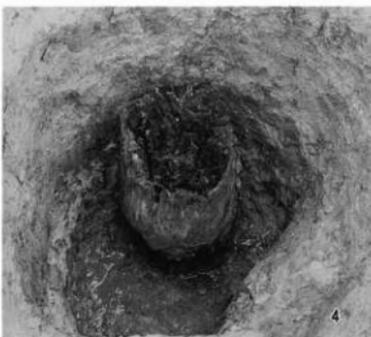
1. 調査風景

2. SB01P 2



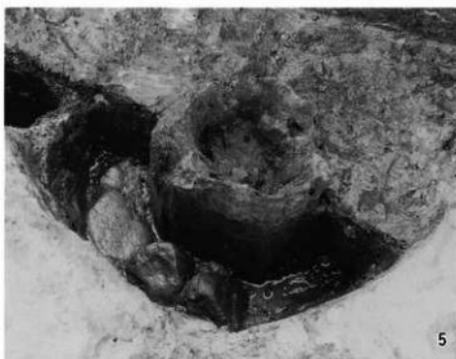
3. SB01P 8土層

4. SK01



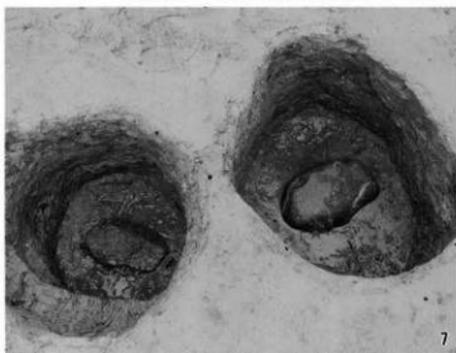
5. P10

6. P21



7. P22(左)
P23(右)

8. SD14(南から)



図版 4

9地区の遺構(4)



1



2

1. SD06 B・12

(南から)

2. SD06 B

(北から)



3



4

3. SD06 B 井堰

4. SE02



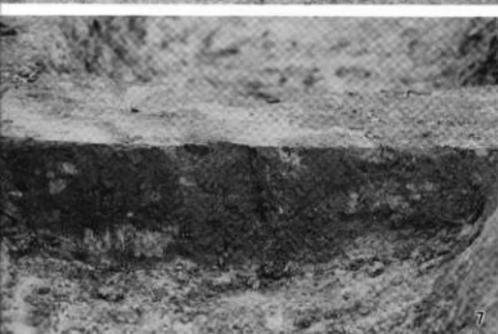
5



6

5. SD01土層

6. SB01 P 5



7



8

7. SD08

8. SE01内の石

図版5

10地区の遺構(1)

1. 遠景 (上空北から)



2. 近景 (西から)

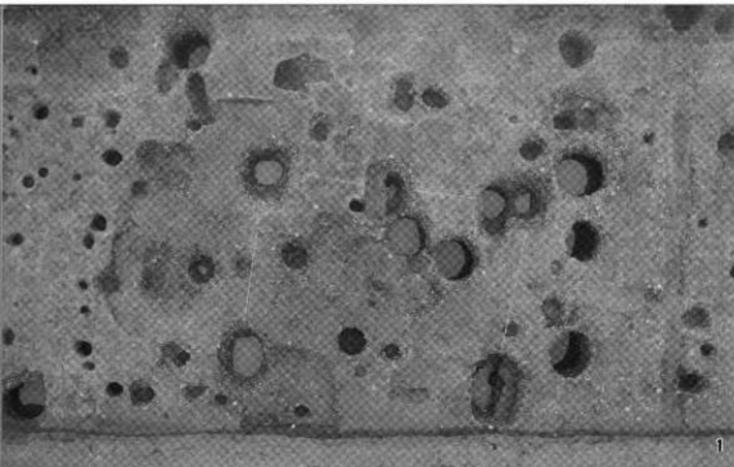


3. 近景 (東から)



図版6

10地区の遺構(2)



1

1. SB01付近(上空から)



2

2. SB01付近(北から)



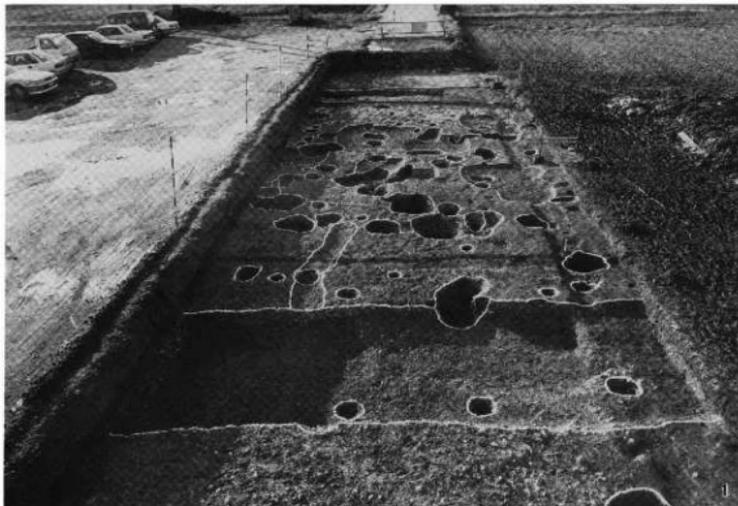
3

3. SX01(北から)

図版 7

10地区の遺構(3)

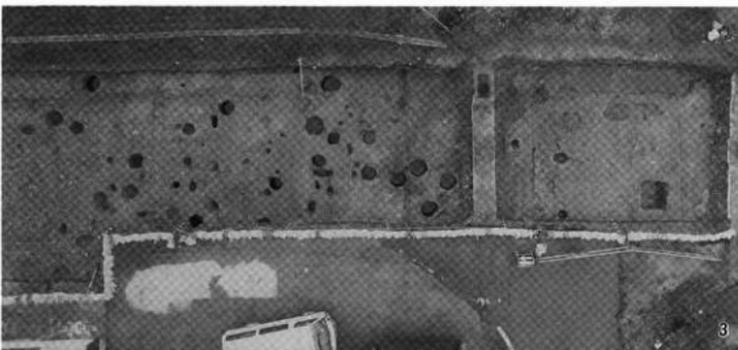
1. SB01・02・SD03付近
(東から)



2. SK07~10・SE23~34
付近 (西から)



3. 同上 (上空から)





1

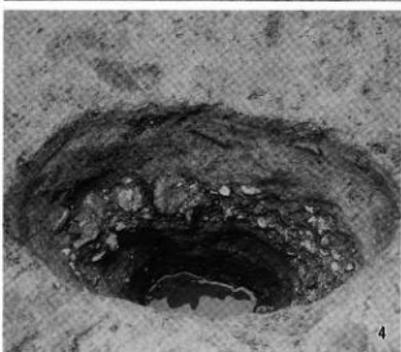


2

図版 8
10地区の遺構(4)

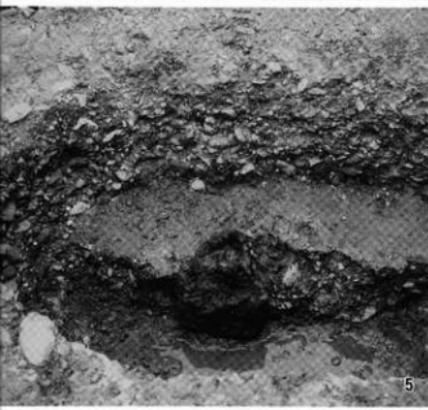


3

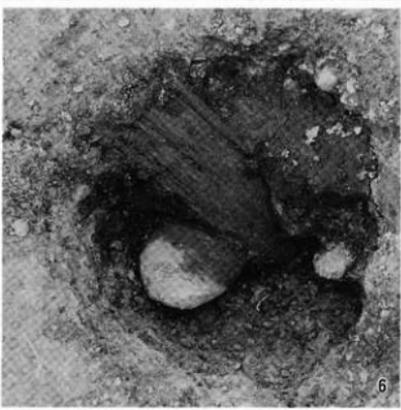


4

3. SK01上層
4. P28



5



6

5. SB01 P 2
6. P 1



7



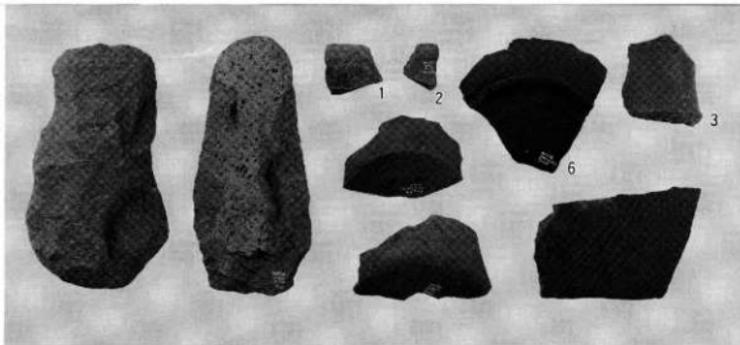
8

7. SE35
8. SD05・SX01
土層

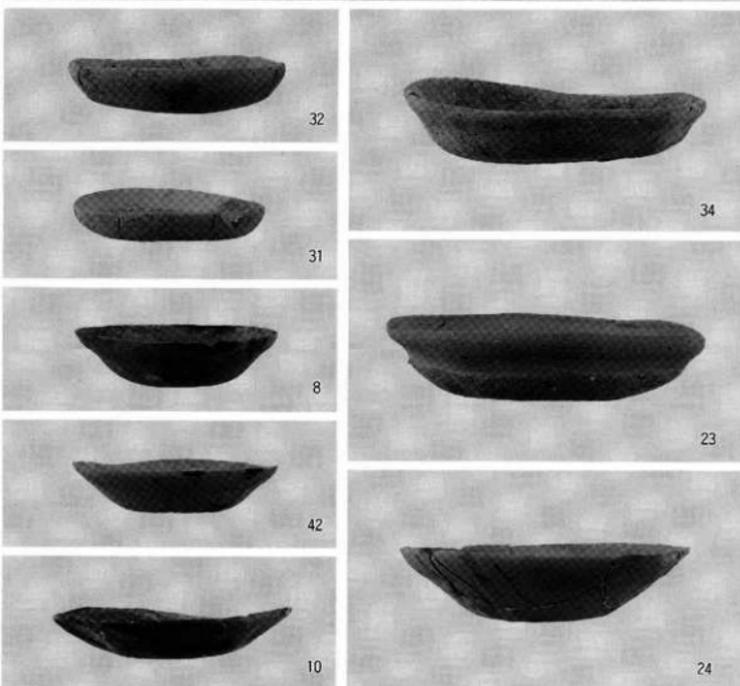
図版9

9地区の遺物(1)

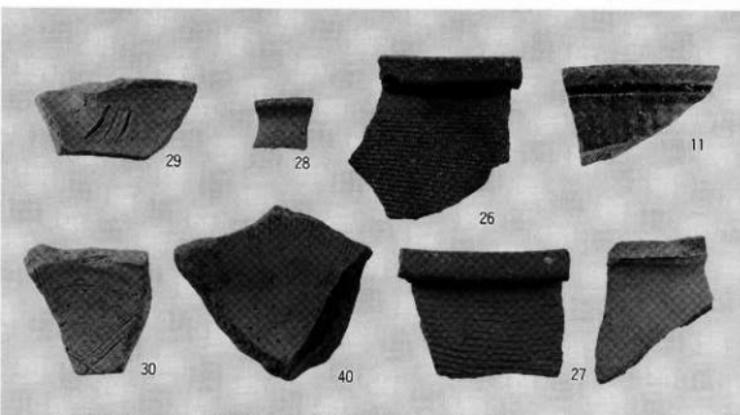
(1:3)



打製石斧・土師器・須恵器



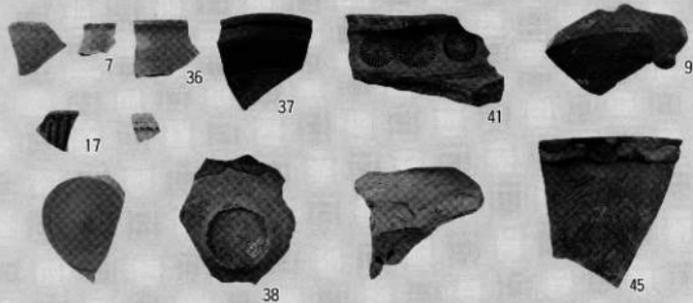
土師器(1:2)



図版10

9地区の遺物(2)

(1:3)



瀬戸美濃・青磁・越中瀬戸・青花・瓦器

左上:銅製獸脚(1:2)



21



49



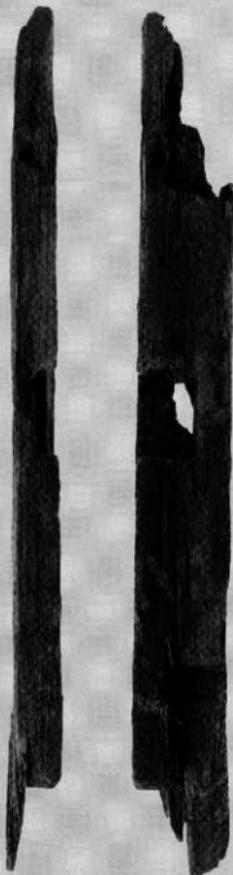
47



46



48



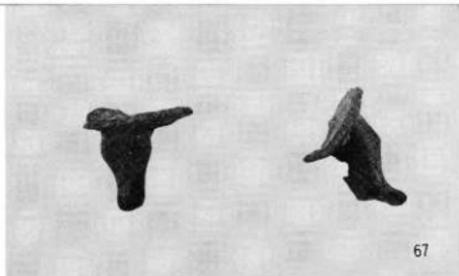
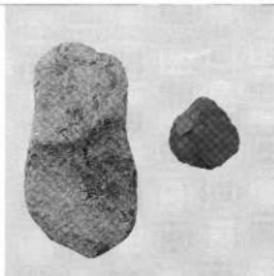
50

木製品
左下:板石塔婆

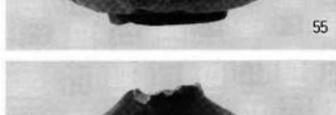
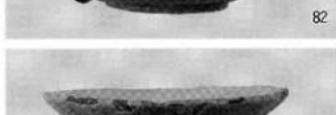
図版11

10地区の遺物1)
(1:2)

左:打製石斧・搔器
(1:3)
右:鉄製獸脚



土師器



瀬戸美濃・越中瀬戸・珠洲



左:越中瀬戸内面の花文
右:珠洲 (1:3)

67

63

65

74

84

76

82

68

55

75

73

74

55

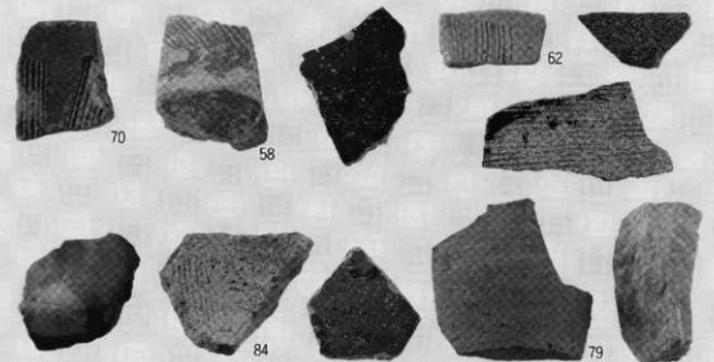
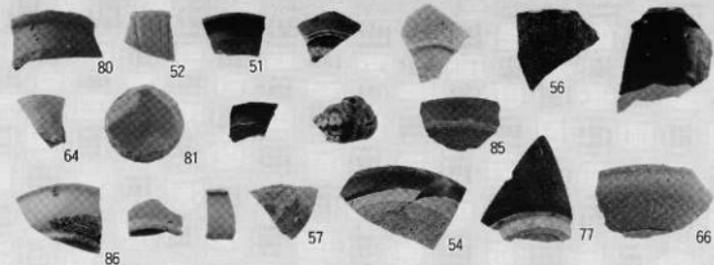
31

図版12

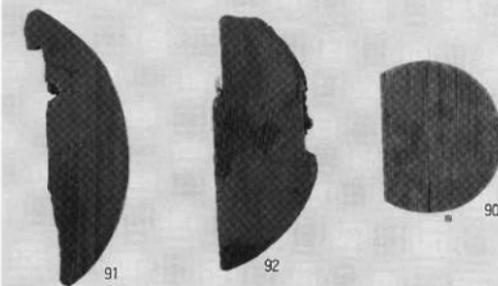
10地区の遺物(2)

(1:3)

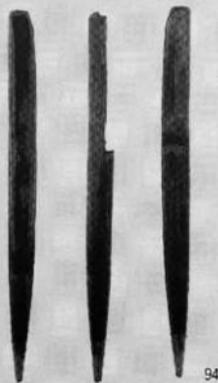
青磁・白磁・
瀬戸美濃・越中瀬戸



珠洲・越前・瓦器・砥石



左上:銅銭 (1:2)



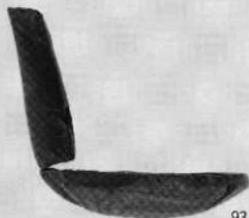
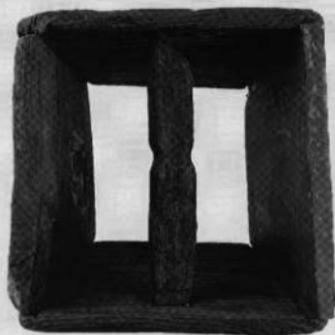
木製品

図版13

10地区の遺物(3)

(1:3)

右上:杓子



93

左:吊瓶
右下:箱物

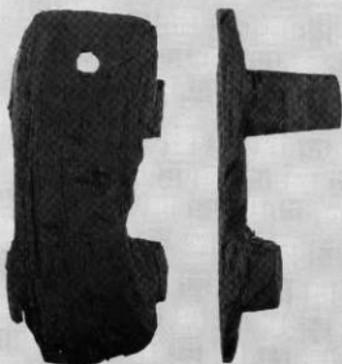


95

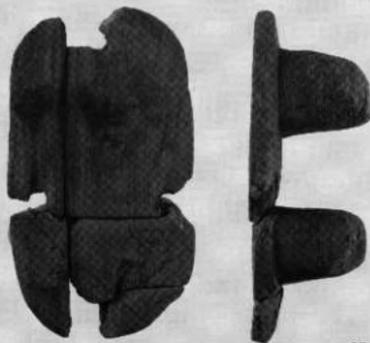


96

下駄



98

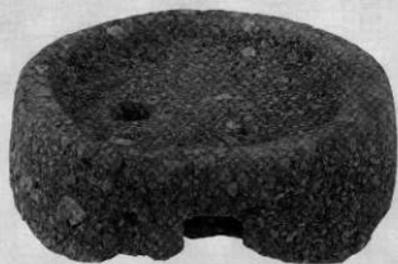


97

図版14

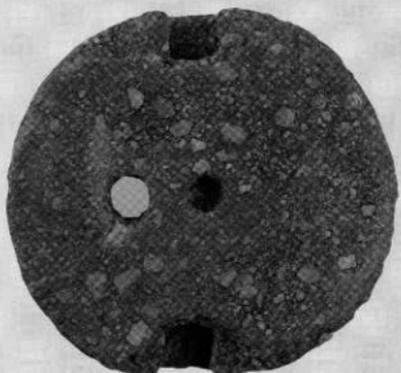
10地区の遺物(4)

(1:4)



104

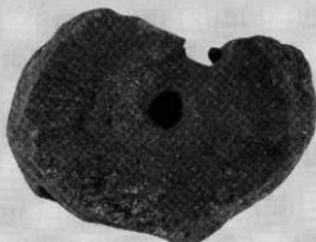
石臼・茶臼・石鉢



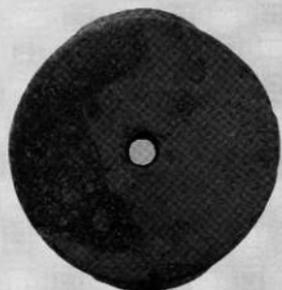
100



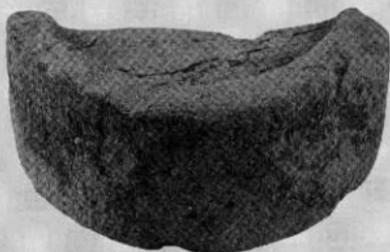
102



101



103



99

報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくみつまうちうめはらごまどういせきぐん							
書名	富山県福光町梅原胡摩堂遺跡群Ⅲ							
副書名	県営一般農道整備事業（田中・梅原地区）に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告（4）							
編著者名	久々忠義、佐藤聖子							
編集機関	富山県福光町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒939-01 富山県西砺波郡福光町荒木1550 T.F.L.(0763)52-1111							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
梅原胡摩堂	富山県 福光町梅原	16421	180	36度 33分 30秒	136度 54分 20秒	19951018 ～ 19951220	960㎡	県営一般農道 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
梅原胡摩堂	集落	縄文時代 弥生時代 奈良・平 安時代、 中世、近 世	建物跡、井戸、堀、溝、 砂利敷き道路、竪穴、井 堰、その他の柱穴、水田 跡	石器、須恵器、土師 器、中世上師器、珠 洲、越前、瀬戸、青 磁、白磁、越中瀬戸、 陶磁器、宋銭、吊瓶、 曲物、ひき臼、茶臼、 香炉の足、桶底板、 柱根、板石塔婆		16世紀後半に梅原に所在 した瑞泉寺の分家寺梅原 坊に関連すると推定され る		

県営一般農道整備事業（田中・梅原地区）
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(4)

富山県福光町胡摩堂遺跡群Ⅲ

平成8年3月29日

編集 福光町教育委員会
富山県埋蔵文化財センター

発行 福光町教育委員会

印刷 日興印刷株式会社

